

## もう一つの『文章世界』

——大月隆と文学同志会のことども——

### 宗 像 和 重

『文章世界』といえば、明治三十九年（一九〇六）に博文館が創刊した文芸雑誌、投書雑誌として知られている。とくに、田山花袋が編集を担当していたこともあって、明治四十年代には自然主義文学の一つの拠点となり、またその投書欄には、室生犀星、久保田万太郎、吉屋信子、内田百閒、小島政二郎、片岡鉄兵、横光利一ら、のちに作家として名をなした多くの名前を見出すことができる。いま、確認のために、小林一郎氏の執筆になる『文章世界』の解題（『大百科事典』第十三巻、一九八五年六月、平凡社）を掲げておく（原文は横組み、洋数字で、『』に《》を用いる）。

文芸雑誌。一九〇六年（明治三十九）三月～二十年（大正九）十二月、博文館より刊、通巻二百四冊。終刊後、二十一年一月から『新文学』と改題し続刊したが、翌二十二年十二月終刊。この雑誌は投書雑誌『中学世界』（一八九八年九月～一九三〇年五月）に寄せられる原稿が多くなったので、田山花袋が主筆になり前田晃（木城）と、やや専門化した投書雑誌として発刊

したものの。のち、『早稲田文学』や『趣味』（一九〇六年六月～一〇年七月）とともに小説や評論をかかけ、自然主義文学運動のひとつの拠点となって行った。

ここに、同じ博文館の投書雑誌『中学世界』との関係が記されているが、この『文章世界』が当初、実用的な文章作法の鍛練を目的として創刊されたことは、花袋の手になる創刊号の「発刊の辞」に、「敢えて論説と言はず、美文と言はず、書簡文と言はず、浮華を排し、形式を排し、朦朧を排するは、今の文を学ぶもの、最も必要とする所なるべし。（中略）吾人微力なりと雖も、亦この方針の下に、期する所に向つて邁往せんとす」とあることによっても知られる。「論説」「美文」「書簡文」の名前があがっているように、「今の文」の諸相に分け入り、その多様な世界を探索するというのが、『文章世界』という雑誌の題号の由来にもなっているだろう。

ただ、同じ『文章世界』という題号をもつ雑誌が、博文館のこの『文章世界』に先立って刊行されていたことについては、十分に知

られているとはいえない。すなわち、明治三十三年（一九〇〇）三月に、大月隆を編輯兼発行人として文学同志会から発刊された月刊誌『文章世界』がそれである。後述するように、今日では全体像を把握することの難しいこの雑誌と、発行母体である大月隆の文学同志会に目を向けることで、博文館の『文章世界』に先立つ明治三十年代の「文」と「文章」、そして「文学」の世界の一端を探りたい、というのが筆者の目論見である。ただ紙数の関係もあって、本稿では大月隆と文学同志会の発足の概観と、『文章世界』の内容の確認に止まることをお断りしておきたい。

## 一、大月隆と文学同志会

大月隆は、明治二十年代後半から積極的な著作活動をおこなうとともに、文学同志会を起こして出版活動にも取り組んだ人物だが、その履歴や人物像については、ほとんど知られていない。そのため、従来の書誌では、同時代の評論家大月隆仗と混同されることも少なくない<sup>①</sup>。今日、この大月隆と文学同志会について最も詳しいのは、齊藤英子氏の「解説『理想の大臣』（菊地茂著作集第三巻『大正デモクラシー期・昭和初期論文集その他』昭和五十九年八月、早稲田大学出版部）である。『理想の大臣』は、早稲田大学高等予科の学生であった菊地茂（松堂）が、明治三十五年（一九〇二）三月に文学同志会から刊行した著書で、齊藤氏はこの解説の注において、大

月隆の経歴を次のようにまとめておられる。

明治元年、或は慶応三年頃、長野県筑摩郡山形村（？）に生れる。没年不明。月乗、乗山、鶴城、空助などの号を持つ<sup>②</sup>。少年時代には大変なわんぱくで、遊ぶときはガキ大将だった。戦争ごっこの相手の少年に投げられた石が額に当り、成人したのちも傷痕となって残った。隆の父母は、彼の養育に手を焼き、伯父の教育の厳格さに期待し父の姉の婚家百瀬家にあずけ養子とした。隆が二男だからでもあった。伯父夫婦は子供がなく隆を実子同様に愛した。

隆は一五歳の年に、東京に出て「立身出世」すべく、僅かの金を懐に無断で家を出た。上京後、『東京日日新聞』（？）の号外売りをしたり、『東京日日新聞』記者（？）・某の書生に住みこんだりして、苦学をしながら某語学校のドイツ語科に学んだ。卒業後は、主人の世話で『日日新聞』（？）の外事係になった。隆の家出以来心労のあまり病弱だった伯母は死に、父も死んだ。隆は一度故郷に戻ったが、以来、東京に居を定め、某家の女性と婚約をした（？）三年後、某家の強い要請により婿養子になったが離縁された（？）。養家の「家風」に合わなかったためである（？）

大月隆の再婚（？）の妻の名前はひさ子という。ぬれつばめの雅号を持つ詩人である。（合同詩集『詩の神』（明治三六年ひさ子・隆他）、『心琴』（同年。隆・金子筑水他）がある。

文学同志会刊行。）

大月隆は明治二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇冊。同会発行の図書約一〇〇冊。前述のように、社会評論、人物評論の著書を多く出版したが、その他文学評論、評伝、合同詩集、実用書、啓蒙書、古典文学などの刊行も多い。大月隆の著書、編書に次のものがある。

以下、大月隆の編著作が列挙されているが、ここでは省略する。現在のところ、大月隆の経歴に関するまとまった唯一の記述で、私も教えられたところの多い労作だが、「文中（？）印は断定出来ないという意味である」という断りもあるように、その足跡にはまだ不明な点が多い。また齊藤氏は、「大月隆の著書のうち、『人生の初旅』（明治三二年）『人生の悔悟』（同年）より、大月隆の経歴を調査し得た範囲で次のように記す」として、右の経歴をまとめておられるが、『人生の初旅』（明治三十一年九月、文学同志会）は、長野県出身の苦学生菅原実が、立身の志をもって上京し、世に出て行く足跡を二人の佳人との交渉を通して描いたもので、「序」に「本書は架空の構造説にあらざして一の実行記録なり」とはあるものの、どこまでが事実で即した記述であるか判断としない。一方、「余は片田舎のものなりしが、幼かりし頃は、父の感癖にかゝりて、折々、頭を打たる、事の多かりき」と始まる『人生の悔悟』（明治三十二年九月、文学同志会）のほうは、伝記的な記述が多くを占めているように思われるが、「片田舎」をはじめとする具体的な地名や場所、

また年月の表記がほとんどなく、本書には「美人に生れし人の悔悟」「都会にありし人の悔悟」など、「悔悟」一般に関する記述も多い。

幾つかの著書の奥付に「長野県平民」とあり、長野県出身であることを除いて、大月隆の経歴や足跡については、ほとんど未詳の状態に近いのが実情である。したがって、ここではまず、その著作に即して足跡を概観することから始めたい（以下、著作の番号は本稿における便宜的なものであって、大月隆の編著書の刊行順そのものではない）。

- ①大月隆著『道と人』（明治二十六年八月、十字屋岩藤錠太郎）
- ②大月隆著『文学の調和』（明治二十七年二月、書肆岩藤錠太郎）
- ③大月隆著『そくらてす 純美文学哲学の鼻祖』（明治二十七年五月、有明堂）

- ④大月隆著『家の宝』（明治二十八年六月、文学同志会）
- ⑤大月隆著『吾家の憲法』（明治二十八年十二月、開新堂）
- ⑥大月隆著『美妙』（明治二十九年一月、文学同志会）
- ⑦大月隆著『実業の宝』（明治二十九年五月、文学同志会）

このうち「戦慄せよ同胞。警醒せよ兄弟。悪疫は猖獗を極めたり、鳩毒瘴烈、既に骨漿を爛かさんとす」と始まる①の『道と人』は、序文を寄せている植村正久が、「大月隆君道と人と題する一書を著はし余に向ひて之に序せんことを請はる余其書を閲読するの機会を得ず僅かに其目次を読下したるのみなれと思ふに基督教を研究しつゝ、ある求道者を啓発せんと欲するの趣意なるべし」と、未読であることを断りつつ推測している、まさにそのような警世と伝道の書

として刊行されている。この点は、自序において「余伊豆の温泉にクリスト教を講ず館主之を筆記して世に公にせんことを勸む其不完全を顧みずして之を上梓する所以なり」と記すところで、前掲の『人生の悔悟』において、「於是余は宗教を研究して日本の悪風俗を一掃せんと志せり、是れ當時の目的とする所の堅志なりし、余は素より仏学の素養は多少心得居る故に、直様クリスト教の経書を研究し始めたり」とあることも符合する。

そして大月隆にとつては、こうした「天真の道理」あるいは「円満なる思想」を淵源とし、また体現するものこそが、「文学」にはかならない。「文学は社会の発達人心の改良を目的として円満なる思想より流れ出つる種々なる文藻にして、其源は天真の道理より溢れ出つるものなり」とは、②の『文学の調和』が掲げる「文学の定義」の一つである。ここにはまた、「文学とは種々なる社会に各々適合する完全なる思想より出つる文詞の記述にして人生本能の発表なり」「文学とは知情意を以て宇内を觀察し、人生をして快樂の知に進めんか為に善美なる目的を以て美術的に発表する円満なる思想の記録なり」といった定義も掲げられ、さらに「文学は其の最も広き意味にては総ての筆記、若くは印刷したる著作にして觀察、思想若くは想像の結果を保存するものを含む」とも述べていて、大月隆において「文学」は、いわゆる「文芸」の範疇を超えて、すべての書かれたもの（＝文章）を包括する概念として理解されている。本書は、「文学の蘊淵」「文学の目的」「文学の発達」「文学の調停」の

四章にわたつて、「文学」の意味を論述したもののだが、実際にはその内容よりも著者の「熱情」にこそ見るべき点があることを、同時代の批評は次のように指摘している。『国民之友』第二百二十号（明治二十七年三月）「批評」欄掲載の無署名の批評である。

著者は思想家なり、哲学を好み、詩文を愛す、其性癖は哲学者的詩人或ひは詩人的哲学者たらんとするに在り、然れども年なほ若くにして思想未だ熟せず、想像いまだ膽かならず、只情類りに内に熱する耳、此熱情発して「文学の調和」となれり、「文学の調和」といふ其名すでに幽玄なり、幽玄を以て始まり、幽玄を以て終る、是れ本書の性質にして、長処も此にあれば短処も此に在り、（中略）

彼が文章は之を悪く言へば含糊衝決なり、彼が議論は之を悪く言ば支離滅裂なり、然れども彼の大エマルスンも含糊衝決支離滅裂を以て譏られたるに非ずや、少大月氏の此事何ぞ怪むを須ひんや、詩人的思想は動もすれば此の如く成らんとす、（以下略）

大月隆の「詩人的思想」の特色が端的に要約された批評だと思つが、「幽玄を以て始まり、幽玄を以て終る」という点では、この時期の著書のうち、⑥『美妙』に及ぶものはない。「美とは万象の結氣襲ひ来りて吾人の情緒を動かし、とき妙機名くべからざる愉快の感情を以て又万象に交際する趣味を云ふ」「妙とは善悪異全黑白醜美の間に交会的の離るべからざる雅趣ありて万物皆調停せらる、処の致味を云ふ」という著者が、「声音」「艶色」「情」「知」「自然」「心

「美妙」のなかに「美妙」のありかを探ろうとした一冊である。「天地は無限の一大塊にして、大なる動物に似たり。人は活動せる動物にして、小なる天地の如し」と書き出され、全編圏点の打たれた調子の高いこの著書は、その「幽玄」ゆえに同時代の青年を惹きつけるところがあつたようで、架蔵本は明治四十五年（一九一二）五月発行の第八十一版を謳っている。また、この『美妙』は前後篇の二部構成をとっているが、その後篇は『文学の調和』の本文が構成もそのままに収録されている。この点では、前掲した『人生の初旅』も『勤学日記』（明治三十年七月、文学同志会）を増補して新たな一冊としたものであり、大月隆の著書にはこうした内容の重複が少なからず存在する。つまり、伝道における説教にも似て、同じことを確信的に繰り返すこと自体が、特定の読者との結びつきをより強固なものにしていき、それが版を重ねる要因にもなっていると思われる。後述するように、『文学の調和』にも五版と記されたものがあり、その実態の検証は必要だが、大月隆の著書における内容の重複と重版の多さは、特筆すべきことの一つである。

ところで、この『美妙』の序文には、「科学と道誼の一致する妙理を知尋せんとせば……」「二十世紀文学の帰処を知尋せんとせば……」「世界大文豪の思想を知尋せんとせば……」などと、本書の目的が列挙されているが、そのなかにやや異質と思える「立身の大道を尋ねんとせば……」という項目がある。しかし、前掲の初期著作のリストを振り返れば、③『そくらてす』の副題にある「純美文

学哲学」に関する著作に混じって、④『家の宝』、⑤『吾家の憲法』、⑦『実業の宝』など、実学的な内容が含まれている点にも、大月隆の著書の特徴がある。『実業の宝』には、「如何にせば完全に身を立て家を起し独立し自治し人の厄介にならざる様の身となるべきか」とあるが、すでに『文学の調和』にも、「文学ありて社会あるにあらず、社会ありて文学あるものなり、社会ありて人間あるにあらず、人間ありて社会あるものなり」という一節があり、文学を人間の社会的な事業のなかに位置づけ、その「調和」を模索する姿勢のなかに、おのずから実学的な経世済民の思考が胚胎していたといつても過言ではない。

そして、この初期著作のリストで確認できるように、当初は十字屋岩藤錠太郎、有明堂、開新堂などを版元としていた大月隆の著書は、『家の宝』（明治二十八年六月）から文学同志会の出版とされている。ちなみに、最初の著書『道と人』の奥付によれば、発行所は十字屋岩藤錠太郎は「東京市神田区錦町三丁目式番地」であり、著作兼発行者である大月隆は同番地の「東京市神田区錦町三丁目式番地寄留」となっている。また同じく岩藤錠太郎出版の『文学の調和』（明治二十七年二月）には、管見に入ったもので、初版や再版（明治二十七年四月）に、奥付は「十字屋岩藤錠太郎」だが、表紙に「文学同志会出版」と刷り込まれているものがある。また、五版（明治三十年一月）は、奥付も発元が文学同志会となっている。これらを見ると、実際の文学同志会の出版は明治二十八年（一八九五）六

月の『家の宝』からだ、その組織は前年の明治二十七年（一八九四）から、岩藤錠太郎との何らかの関係のもとに成立していたとも考えられる。

その最初の出版物である『家の宝』の奥付によれば、著作者兼発行者が大月隆で、住所は東京市牛込市谷砂土原町二丁目七番地、発元は文学同志会で、住所は東京市牛込市谷砂土原町二丁目七番地。次の『美妙』では、著作者兼発行者が大月隆で、住所は東京市神田錦町一丁目八番地、発元は文学全志会で、住所は同じく東京市神田錦町一丁目八番地。この間、住所は転居しているが、いずれも大月隆と文学同志会は同番地で、すなわち大月隆が明治二十七年（一八九四）ないし二十八年（一八九五）に起こしたのが、文学同志会ということになる。この組織について、『美妙』の巻末に「文学全志会々則」が掲げられているので、やや長いが次に引いておきたい。

余か会の目的は東西の文学を調和して日本の新文学理想を起し  
実業と文学の調和文学と諸科学の帰一する所の妙理を発表し余  
が国をして実地と理想と相伴へる処となし進んでは東西を教化  
し得べき純正円満の光明を吾か同胞のうちより世界に向ひて発  
するにあり余か会は社会より寄送する文章詩歌演芸記小説経文  
比喩文訳文俳諧等を集め紙数二百頁以上に集まるときは之を会  
員文学集となして出版し正員及び愛読者に配布す  
吾が会に実価として一ケ年に三十銭納むるものを正員となし其  
時の市価を出して購ふものを客員となす然して正員は政治を除

くの外何事にても著者を招きて質問するの権を有す

吾か会は文学の責任を尽さんとして立ちたるものなれば如何なる困難あるも会員に迷惑を負はしむることを得ず又実価以外の金を集むる事を得ず又実価十五銭以上の書を出さず

吾会員として二ケ年以上正員名簿に記したるものにして若し図らずも不幸の位置に陥りたるときは本会は可成其人の生業を扶助すべし

吾か会は本会の目的を賛成し困苦を辞せずして文学に専任せんとする志願者あるときは会は相当の衣食住を給して本会の事務専任者の一人となすべし

吾会は正員一人に充つるときは世界有名の五大経書を集輯し普通人に読み得るものとなして発表すべし余か会の出版は文学部実業部家庭部会員文学集部と順次一ケ年に二回出版をなす

これによれば、文学同志会は出版社にとどまらぬ会員組織として発足したことがわかる。もとよりこの背景には、同時期に多くの文学会組織が発足していることが指摘できる。後述するように、『文章世界』創刊にあたって明治三十三年（一九〇〇）二月二十四日付の『信濃毎日新聞』に広告が掲載されているが、同月の紙面だけでも、『国文雑誌 古今文学』を発行する古今文学会、『女学講義』を発行する大日本女学会、『講義録』を発行する国語漢文学会の広告などが、見出される。ただ、大日本女学会が小松宮大妃を、国語漢文学会が伯爵東久世通禧を総裁に戴き、会費も「三月五十七銭」（古

今文学会、「一箇月金二十銭」(大日本女学会)、「一ヶ月金卅五銭」(国語漢文学会)であるのに対し、大月隆主催の文学同志会は、はるかにつまましい。さらに特徴的なのは、生活困窮の会員に対して「生業を扶助」することを謳っていることで、その実効性は定かではないが、「文学有志望者の互助組織<sup>③</sup>」としての側面を有している点が、同時代の文学会組織のなかでも、とりわけユニークな存在といわなければならぬ。以後、大月隆はこの文学同志会に拠って出版活動を展開していくことになるが、前掲の初期著作に続いて文学同志会から刊行された大月隆の編著書、およびそれ以外の著書も含めて掲げておきたい。なお、<sup>②</sup>大月隆編『古哲格言』のみ隆盛館からの刊行である。

- ⑧ 大月隆著『人間学』(明治三十年二月)
- ⑨ 大月隆著『勤学日記』(明治三十年七月)
- ⑩ 森可次著『保命主義 人生の目的』(明治三十年七月)
- ⑪ 林恕哉著『婦人実務録』(明治三十年七月)
- ⑫ 秋月菴主人編纂『馬琴妙文集』(明治三十一年四月)
- ⑬ 大月隆著『人生の初旅』(明治三十一年九月)
- ⑭ 大月隆著『人生の老旅』(明治三十二年二月)
- ⑮ 漆山又四郎校訂『鴨長明海道記』(明治三十二年二月)
- ⑯ 大月隆編『新体詩集 山高水長』(明治三十二年二月)
- ⑰ 文学同志会編纂『立身の事蹟』(明治三十二年三月)
- ⑱ 大月隆著『人生の気力』(明治三十二年五月)

- ⑲ 漆山又四郎著『傑作文粹 断巖絶壁』(明治三十二年五月)
- ⑳ 大月隆著『吾人の生活』(明治三十二年六月)
- ㉑ 花外・枯柳・露葉詩集『風月万象』(明治三十二年六月)<sup>④</sup>
- ㉒ 大月隆編『古哲格言』(明治三十二年七月、隆盛館)
- ㉓ 漆山桑村選『紀行文粹 松風吟月』(明治三十二年七月)
- ㉔ 小倉子著『人生の片影』(明治三十二年八月)
- ㉕ 大月隆著『人生の悔悟』(明治三十二年九月)
- ㉖ 大月隆著『廻国雜記』(明治三十二年九月)
- ㉗ 漆山秋月庵編『滑稽妙文集』(明治三十二年十一月)
- ㉘ 中川愛氷編『艷麗文粹』(明治三十二年十二月)
- ㉙ 中川愛氷編『禅学断片』(明治三十二年十二月)
- ㉚ 堀三友・秋野繁吉共著『伊蘇普美伝』(明治三十二年十二月)
- ㉛ 中川愛氷編『戯曲妙文集』(明治三十三年二月)
- ㉜ 大月隆著『人物の裏面』(明治三十三年二月)
- ㉝ 鶴城生著『青年の将来』(明治三十三年四月)
- ㉞ 野田織衛著『研学の順序』(明治三十三年四月)
- ㉟ 野崎崎次郎(海東)著『聖僧道元』(明治三十三年四月)
- ㊱ 鈴木江山著『天然の声』(明治三十三年六月)
- ㊲ 文学同志会編『韓退之の生涯 天籟万丈』(明治三十三年六月)
- ㊳ 川村八郎著『虚心談』(明治三十三年八月)
- ㊴ 超然隠士(三原資太郎)著『小哲学』(明治三十三年八月)
- ㊵ 今井菊堂編『万情万眉』(明治三十三年十月)

④1 鈴木芳太郎著『活精神』（明治三十三年十一月）

④2 大月隆編『山水記事論説文』（明治三十三年十一月）<sup>5)</sup>

④3 中村諦梁著『日本仏教十二傑伝論』（明治三十三年十二月）

ここでは、明治三十三年（一九〇〇）末までの刊行物を掲げてみた。いずれも複製本の簡素な表紙・装幀で、百頁前後の小冊子も多いが、きわめて旺盛な出版活動といわなければならない。このうち、⑨『勤学日記』、⑬『人生の初旅』、⑭『人生の老旅』などは大月隆の著書だが、前述したように、『人生の初旅』は『勤学日記』を増補して刊行したもので、また『人生の老旅』はその続編にあたる。

著者の伝記的な要素も含まれていると思われるが、立身をめざす青年と二人の佳人との数奇な運命を描いたもので、小説的要素が強い作品である。一方で、⑩森可次著『保命主義 人生の目的』、⑪林恕哉著『婦人実務録』など、文学同志会会員の寄稿によると考えられる著書、編著も少なくない。

このうち、⑫『馬琴妙文集』は内題に「萩月菴主人編纂」とあるものの、奥付では編輯兼発行者として大月隆の名前が掲げられているだけで、⑮『鴨長明海道記』⑯『傑作文粹 断巖絶壁』の漆山又四郎、⑳『紀行文粹 松風吟月』の漆山桑村、㉑『滑稽妙文集』の漆山萩月庵と同一人物かと思われる萩月菴主人の名前は、奥付には見えない。また㉒『人生の片影』も、茗溪堂主人名義の「序」には「予か友小倉子深く宗教を信じ、（中略）頃日自己の思索する所を録して一書を著し、題して人生の片影といふ、予に示して之れか序を

嘱せらる」とあるが、奥付ではやはり編輯兼発行者として大月隆の名前があるだけで、これらの著者・編者と大月隆との関係が不分明な場合が少なくない（文学同志会の刊行物には、巻末に出版広告が掲載されているが、ほとんどは書名とその紹介のみで、著者名が欠けているのが大半である）。とくに⑳『青年の将来』は、表紙に「大月隆著」、「自序」に鶴城生とあり、奥付では著者鶴城生、発行者大月隆として、住所はいずれも「東京市神田区錦町一丁目十番地」となっている。

このことから、鶴城生は大月隆の雅号として、たとえば国立国会図書館のデータでも「大月隆（鶴城生）著」とされているが、「緒言」には「弱冠、会津の中学に学ぶや、前小柳校長の精神的教訓予の一生忘るべからざるものあり」とあって、白虎隊の名前も記されている。すなわち「鶴城生」は会津鶴ヶ城にちなんだ雅号であって、長野県平民の大月隆とは別人であるように思われる。

また、「古今集序」「帰去来辞」「長恨歌」「おくの細道」など和漢の名文を抜粋した⑲漆山又四郎編『傑作文粹 断巖絶壁』、横井也有・五老井許六・松尾芭蕉らの紀行文を抜粋した⑳漆山桑村編『紀行文粹 松風吟月』などの「文粹」、㉑萩月菴主人編『馬琴妙文集』、㉒漆山萩月庵編『滑稽妙文集』、㉓中川愛水編『戯曲妙文集』などの「妙文集」が多く刊行されている。このうち、「妙文集」については、高木元氏「近世後期小説受容史試論——明治期の序文集妙文集をめぐって——」（国文学研究資料館編『明治の出版文化』所収、二〇〇二年三月、臨川書店）に、文学同志会刊行の「妙文集」につ



いて詳しい解題がある。そこには、「文学同志会という板元が明治三十年代に一連の「妙文集」シリーズを出して目目を引く」とあるが、これまで見てきたように、「文学」をすべての書かれたもの（＝文章）を包括する概念として理解している大月隆にとって、会員による作文の寄稿と、その手本となる「文粹」「妙文」などの文範は、いわば「文学」における車の両輪ともいべき二つの事業だった。そこに生れるのが雑誌『文章世界』で、前述したように、創刊号が刊行されたのはこの明治三十三年（一九〇〇）三月三日のことであった。

## 二、『文章世界』目次補遺

『文章世界』創刊号は、菊判（縦218mm、横147mm）九十八頁、広告十六頁、定価金十銭。編輯兼発行人 東京市神田区錦町一丁目十番地 大月隆／印刷人 東京麹町区飯田町五丁目一番地 千葉四郎三郎／印刷所 東京麹町区飯田町五丁目一番地 文学同志会印刷所／発兌元 東京市神田区錦町一丁目十番地 文学同志会。表紙は上段に「文章世界」の題号を右横書きで掲げ、その下に「第壹巻第壹号」の文字と「毎月三日 一回発行」とある。また縦組みで、「文章世界は日本の文章を奨励する目的を以て生れ出たり文章世界は主として読者と文章共研の機械として生れ出たり次号よりは普く読者の投稿を掲載す」とあって、この文章は一・二号とも同じだが、三

号以降は「次号よりは」が「毎号毎回共」と差し替えられている。そして中央に、「文章世界毎号掲載の目次」として、次の項目が掲げられている。

- 論文
- 紀行文
- 韻文
- 艶麗文
- 祝辞文
- 碑文
- 批評文
- 叙事文
- 暗号電報文
- 散文
- 詩文
- 新体詩
- 滑稽文
- 俳文
- 偈文
- 俗謡文
- 伝紀文
- 記事文
- 美文
- 戯曲文
- 箴文
- 日用文
- 経文
- 銘文
- 随筆文
- 諷刺文
- 漫録文

すなわちこれが、『文章世界』における「文章」の種々相および範疇で、ここには「小説」を除いて、当代の「文」が網羅されているとあって過言ではない。その「文章共研の機械」として本誌は位置づけられているが、この体裁は次号以降も踏襲され、各号ごとの目次は設けずに、「論文」「紀行文」「韻文」などの見出しのもとに、例文が掲載されている（ただし、右の目次に掲げられた「文」が、すべて各号の見出しに挙げられているわけではない）。とくに創刊号では、巻頭に「●文章世界は二号より各種の文章を募集す／●文章世界は愛読者の投稿を掲載して同好共研の文料となし其運命を共にせん」と

とを期す／●文章世界へ投稿<sup>(マ)</sup>せるものへは弊会の書類を半価に割引して売捌く／●文章世界へ投稿せる文章は一回四百八十字以下に限る／●文章世界は投稿の文章を没収せず文章の悪しき処は添削して掲載す」と投稿の呼びかけがなされているが、「論文」「批評文」「紀行文」以下の項目に掲げられている例文は、大月乗山(隆)のものを除くと、大半が古人の文章の抜粋で占められている。次に記すように、創刊号については細目があるので、ここでは本文の構成と概要を確認するために、冒頭の数項目のみを例として掲げておきたい。巻頭には口絵があり、「文学同志会」の看板が掲げられた書肆が描かれている。

#### 論文

俗才を論ず 大月乗山

人材論 物徂徠

#### 批評文

現時の文学者 乗山

「人物の裏面」を評す 稲州

#### 紀行文

紀行文 大月乗山

#### 記事文

仏人モーリス、ナンシーノ聯隊に入る (\*無署名)

桃花源記 (\*漢文) 陶潜

雪月楼の記 頼山陽

松島に遊ぶの記 釈元愷

月夜聞琴記 中島広足

記事文の三則 (\*無署名)

このように、「文」ごとの見出しのもとに、例文が二段組みの誌面に掲載されている、素朴な誌面構成である。創刊号は大月隆自身の文章が多いが、後には古人の文章に加えて投稿文が掲載されることになる。また「記事文の三則」のような文章作成の手引きも掲載され、つまり「文範」と「作文」と「作法」の三要素を盛り込んだ雑誌ということになる。ここに「小説」は含まれていないが、これについては右の大月隆「現時の文学者」に、「文学者は須らく天識に神通して人生の状態を善美に導ひく処の文章を草せざるべからず現代の文学者は只文識に俗通して淫猥卑賤の現場を写述す爰を以て其の文章は人を墮落に導びく効ありて真善に近よらしむるの効なし」とある。同文中の「現代の小説」の項目でも、「今の小説の骨子は芸者か相場師を主人公となす之を読むときは恰も暑中に砂漠中を通行するが如し」と述べており、彼の文章観とはまったく相容れない、現代の小説に対する苦しい思いが吐露されている。

ところで、如上の創刊号の記述は、架蔵本によっているが、『文章世界』は現存する号が少なく、終刊の時期も確認できない。比較的まとまって所蔵されているのは、架蔵本(第一巻一〜三号・七号・九号、計五冊)、尾鷲市中央公民館郷土室「紀州尾鷲中村山土井家文庫」所蔵本(第一巻一〜三号・五号、計四冊)、同志社大学今出

川図書館「荒木文庫」所蔵本（第一巻一・二号、第二巻一・二号、計四冊）で、ほかに第一巻一号ないし二号を所蔵している図書館が数館確認できる程度である（このほかに増刊号が発行されているが、これについては後述する）。また管見に入った号には、表紙などに蔵書印や名前の印鑑を押してある例が少なくない。これらはおそらく文学同志会の会員によるもので、雑誌には「取次」として東京では東京堂・北隆館合資会社・東海信文合資会社、関西では盛文館の名前が掲げられているから、市販もされていたはずだが、会員間の流通が中心であったことが、今日までまともな伝わることが少なく、散佚を招いた原因ではないかと思われる。このうち、尾鷲市中央公民館郷土室「紀州尾鷲中村山土井家文庫」所蔵の四冊（第一巻一・三号・五号）については、すでに国文学研究資料館の調査によって細目が掲げられているので、ここではそれ以外で現在確認できる第一巻七・九号（架蔵本）、第二巻一・二号（同志社大学今出川図書館「荒木文庫」所蔵本）の細目を掲げておきたい。

まず第一巻第七号は、明治三十三年八月三日発行。菊判（縦218mm、横146mm）百頁、広告八頁、定価金十銭。編輯兼発行人 東京市神田区錦町一丁目十番地 大月隆／印刷人 東京市神田区錦町二丁目三番地 池田良蔵／印刷所 東京市神田区錦町二丁目三番地 知足堂／発行元 東京市神田区錦町一丁目十番地 文学同志会。表紙の体裁は前述の創刊号に準ずるが、本文では巻頭に「論文」の見出しがあるのみで、以下は「文」ごとの見出しは立てられていない。とくに注

記しないものは、文語体の散文である。

● 第壹巻第七号（明治三十三年八月三日発行）

口絵	
断琴（*新体詩）	大月ひさ子
論文	
肖像画の感化	大月乗山 1
兵卒	蓮峯生 3
源義平	相模 高下恭介 6
容貌論	神戸 榎本天涯 7
吉備真備	山梨県 前田寒山 9
富鬼の説	成島柳北 11
御洗粉説帖	山東京伝 11
胡蝶物語序	曲亭馬琴 12
胡瓜	高下才介 13
熊沢蕃山先生之伝（承前）	土岐湖友 14
実定上洛	源平盛衰記 16
重衡の最期	建礼門院右京大夫 19
爐辺閑談	藤井高尚 21
秋の名残	荒木田久老 21
秋懷	加藤千蔭 22
湊川	溪水 22
須磨寺詣で	神戸 榎本天涯 23

- 一日の旅 長野県 今井白岩 24  
 秋日の山遊 群馬県 金峯生 27  
 那須野・時鳥・夕顔・賤の床・西行・新道成寺・貝づくし（\*）  
 謡曲抜粹） 28  
 女子消息文体（承前） 小野お通・春日局・瀬川采女室・鶴  
 殿よの子 31  
 衰かりにやる文 村田春海 36  
 福羽美静に与ふ 三條梨堂 37  
 野辺に誘ふ文 黒沢翁満 37  
 鮫島白鶴に与ふ 山田作楽園 37  
 某に与ふ 山東京伝 38  
 洋行を送るの書 渡辺しん子 38  
 友の不遇を慰る文 神戸 榎本久 39  
 清国暴徒事件に関し予備招集に応ぜし人に送る文 山口県  
 徳重正人 40  
 在籍軍人に送るの書 豊後 一蛙生 40  
 暑中見舞之文・納涼誘引之文 三重県 喜多波羅健次郎 41  
 暑中見舞はれし返事 三重県 奥知久麻三 42  
 遊学する友人に贈る書 松本戊戌学舎生 壬生高一 42  
 姉さまへ みつ子 42  
 浜千鳥 泣苔生 43  
 服部中佐戦死の事を記す 土佐 小野川城岳 44  
 渾名なしの某 相模 細流 45  
 朝顔 香川県 藤井麗山 46  
 和気清磨 嶋根県 武田長三 47  
 午睡の記 徳島県 武岡栄太 48  
 夏の夜 茨城県 久木東海男 48  
 桑井神社の記 長野県 井口弥助 48  
 習志野々宮の記 近衛騎兵 藤島生 49  
 笥狩の記 羽前 新関敏 50  
 納涼の記 三重県 劈岩生 51  
 舟遊之記（\*漢文） 東京府 中田四門 51  
 苦熱記 広島県 波田稔 52  
 詣八天社記 佐賀県 明石不出橋 52  
 秋夜読書の記 大阪府 水谷幸二郎 54  
 喜雨の記 長野県 内山重次郎 54  
 流山町の記 千葉県 星野貞次郎 55  
 豊代山に登りし記 栃木県 仁平義十郎 55  
 霄庚申道行・道中双六・助給の遺書（\*文楽詞抄） 56  
 月夜集（\*漢詩） 熊本県 上野雲平 60  
 紫紅（\*和歌） 水彩 62  
 夢（\*和歌） 宮内俊子 62  
 五色（\*和歌） 宮内猪之熊 63  
 （\*和歌） 宮内千代子・石川六郎・古沢喜次郎・渡辺しん

子・西村光峯・杉田岩太郎・前田寒山・岡崎春翠・山崎花水・  
 赤塚文蔵・白岩・好雅・奥知久麻三 64  
 祝辞 内田周平 70  
 菅生尋常小学校開校祝辞 武岡栄太 72  
 文章世界発行を祝して 長野県 玉井貞雄 72  
 新聞社の開業を祝す 佐賀県 明石不出橘 73  
 文章世界の発刊を祝して 台中北港 金森熹次郎 74  
 文章世界の隆盛を祝して（\*俳句） 信濃 愛翠 74  
 亡友永田一義氏を想ふ 岡山県 相沢雲外 74  
 青葉の窓 相摸 細流子 77  
 田植を觀て所感を記す 香川県 藤井麗山 78  
 読書之樂 長野県 玉井貞雄 79  
 油断大敵 三重県 劈岩生 80  
 基督教の説を聴きて感あり 佐賀県 古川勇一 80  
 野球 秋田県 渡部徳次郎 82  
 旅なる友のもとに 嶋根県 武田長三 83  
 夏の日 静岡県 長尾生 84  
 早起の利益 神戸市 潮見喜一郎 85  
 ある朝の記 長野県 井口弥助 85  
 冬 熊本県 上野雲平 86  
 白骨を見て感あり 大隅 赤坂文蔵 87  
 果敢なき世 栃木県 塩野谷朴堂 87

汽車 宮城県 山中樵夫 89  
 亡友之靈を祭る文 長野県 壬生高一 89  
 大平国太郎君の靈を祭る文 徳島県 武岡栄太 90  
 放言録（一） 今井菊堂 91  
 一夕評 せ、らぎ 92  
 偶感三則（其一） 青武者 96  
 つくし艸（一）（\*今様） 鶴廻舎録 96  
 秋と乙女（\*新体詩） 熊本県 上野雲平 96  
 想亡父（\*新体詩） 水戸市 黒沢孤巖 97  
 恋（\*新体詩） 長野県 神戸芳園 97  
 彼丘（\*新体詩） 大坂府 岡崎春翠 97  
 長野病院へ慈母の迎ひに行きて（\*新体詩） 信濃 宮林東  
 山 98  
 深山（\*新体詩） 明治義会生 内山舜 98  
 無常と発心（\*新体詩） 穂園 98  
 皇太子殿下御婚儀を祝して（\*新体詩） 小野英 99  
 老車夫（\*新体詩） 神戸市 瀬見藤衣 99  
 寄贈書目・読者諸君に注意 100  
 続いて第一巻第九号は、明治三十三年九月三日発行。菊判（縦218  
 mm、横146mm）百頁、広告八頁、定価金十銭。奥付の刊記は第七号と  
 同一。この号では、「文」ごとの見出しはすべて排され、投稿者の  
 文章が古文の抜粹と混在して並んでいる。

●第一卷第九号（明治三十三年九月三日発行）

口絵

（＊俳句） 濛雨・田上・華峯・其山・桑弓・正志

思想の二大潮流 大月乗山 1

人は万物の霊 高下細流 7

兵卒（承前） 鈴木連峯 8

日本文学の将来に就て 香川県 藤井麗山 12

球陽女子学院設立の趣意 沖縄県那覇 石峯三郎 13

御所見小学校開校式祝詞 神奈川県 高下治作 14

少年諸子猛省すべし 長野県 壬生高市 15

旅まくら 本郷駒込 白柳秀湖生 16

一日の紀行 新潟県 柳沢五山 17

鋒鳴（ほこしま） 備前 相沢雲外 18

雨 三重県 奥知久麻三 21

避暑中の一 香川県 藤桂女史 21

船遊 静岡県 深津謙吉 22

花と雨 茨城県 鈴木倉之助 22

加賀井温泉に遊ぶ記・叔父の墓に詣で、 長野県 野村栄之

亟 23

不寝番 長野県 井口弥助 24

林館避暑の記・十七夜之記 広島県 波田稔 25

朝顔 奈良県 晚波 27

神野の御茶屋に桜花を観る記 佐賀県 明石不出橋 27

酒之記 東京市 中田四門 28

入管を送る辞 三重県 桔梗園主人 28

遊学する友に送る文 堀内冬山 29

在京の知人に問合す文 愛媛県 仙波龍助 30

梅見会に友を招く文 長野県 宮林弥蔵 30

梅雨に友人を招く文 佐賀県 明石不出橋 30

文章世界編輯局へ 神戸 溪水 31

古人の文章 愛古生 32

読菅右府伝・雪喩 斎藤拙堂 32

儒者・苗字 本居宣長 34

夏の楽み・読書の楽 貝原益軒 35

夏水喩 小山春山 36

十八楼の記 松尾芭蕉 36

花月の遊 白川楽翁 36

鷹の記 太田南畝 38

煙霞洞主の俳談 流転道人 39

文章百話（禁転載） 井ノ口央洲 41

緑蔭漫筆 今井菊堂 45

二星相語る（＊新体詩） かすみ 52

人の祈と神の答 かすみ 53

偶感三則（其二、三） 青武者 55

樵夫と猿・仙を夢みし男	相模	高下細流	56
犬説	東京市	中田四門	58
蚊説	佐賀県	明石不出橋	59
栽梅説	上毛	金峯生	59
聯合軍の勝利に就て		柴田礼一	60
木かげ集（*和歌）	鶴廻舎緑・宮内猪之熊・宮内千代子・宮内俊子・鈴木倉之助・奥知久麻三・宮林松意・野村栄之丞・金山辰蔵・宮林龍吟		60
作文法			65
学問	伊豆	狩野洞泉	77
残花を探りて	長野県	野村栄之丞	78
春の野辺	秋田県	渡辺徳太郎	78
皇太子殿下の御結婚を祝ひて	鳥根県	武田長三	79
猿劇を観て感あり	三重県	髯岩生	81
青年の遊楽	大分県	赤塚文蔵	81
文章世界愛読者に望む	広島県	壽岳	82
文章世界記者閣下に謝し併せて同胞諸氏に望む		佐賀県 明	
石不出橋			82
名流苦学談を読みて	長野県	宮林松意	83
愛国心	滋賀県	斎藤竹蔭	84
初めて文章世界を読む	秋田県	兎沢雪溪	85
聯合海陸軍勝利之謡（*新体詩）		柴田礼一	86

細流吟（*新体詩）	相模	せゝらぎ	86
（*今様）	東京	宮内猪之熊	87
（*新体詩）	信濃	丸山美采	87
（*今様）		宮内千代子	88
（*新体詩）		宮内俊子	88
（*新体詩）	大坂市	岡崎春翠	89
（*新体詩）	神戸市	溪水	89
（*今様）	土佐	時久新南	90
（*新体詩）	静岡市	手越俊雄庵	90
（*新体詩）	長野県	井口弥助	90
秋のたび路（二）			91
海路の記（白雲日記）	鹿児島	八田知紀	91
世界叢談			94
韓国名妓の吟誦			98
花たばね（*新体詩）		楠茂	98
（*俳句）	松意・白岩・小淳庵・龍吟		99
端書文壇・読者諸君に注意			100

ところで、会員の投稿は第二号から掲げられているが、同号から巻末に掲げられた「読者諸君に注意」には、「投書は大に歓迎して決して没にはせぬ考なれど、没にあらざる為め器量を下げることなきやう、充分推敲の後に願ひたし」「投書は一行二十四字詰にて楷書に限る、然らざるものは没と心得べし」「原稿は毎月二十五日メ切り、

其原稿は翌々月三日発行の本誌に掲載す」と、投稿上の留意点が掲げられている。この、没書にせずという方針が、とりわけ発表の機会乏しかった地方の青年には魅力的であったようで、署名とともに掲げられている出身地は全国に及んでおり、第九号の投稿者には本郷駒込の住所で、白柳秀湖の名前も見える。なかでも、大月隆の出身地長野・信濃の投稿者が多いように思われるが、実際に明治三十三年（一九〇〇）二月二十四日付の『信濃毎日新聞』には、『文章世界』創刊号の広告が掲載され、「投稿は必ず没稿せず添削の上掲載す」ることが強調されており、郷里での普及に力を注いでいることがうかがえる。この広告を見た投稿者、長野県の玉井貞雄「文章世界発行を祝して」（第七号）は、文章を表現すること、活字で発表することに飢えていた青年にとって、この雑誌がいかに歓迎されたかを物語る証言でもある。次の文中に「直ちに父に請ひて毎号愛読を許されたり」という一節もあるが、同号および複数号にわたり、各ジャンルをまたいで熱心な、常連ともいべき投稿者の名前が数多く見えること、さらに同姓の家族ないし縁者と思われる投稿者も少なくないことから、この雑誌の読者環境を推測することができる。

去る二月中信濃毎日新聞に掲載せる文学同志会なる文章世界発刊の広告を見るや、欣然として囊中を探り、初号発刊の当日を待ちて、書林より購求して繙き見るに、誌中幾多の英才健腕、玉章天真爛漫芳香馥郁として溢れ、紛々艶麗美妙の記事あり、

俊抜の論説あり、善良なる訓誨ありて、一として余を訓誘せざるはなく、実に雑誌界の帝王と称するも、敢て過言にあらざるなり、真に一読感歎の外なし、直ちに父に請ひて毎号愛読を許されたり、汝文章世界よ、此隆盛なる大都の本に生れ、市中并ぶ者なき好雑誌よ、愈々成長して、我が為燈明台たれ、羅針盤たらむことを、

ところで、次に掲げるように、『文章世界』の第二巻第一号は、明治三十四年（一九〇一）五月に刊行されている。創刊号が明治三十三年（一九〇〇）三月だから、やや変則的な巻構成になっているが、後述する定期増刊第一巻十六号『活恋』が明治三十四年（一九〇一）四月三日発行で、おそらくはここまでが第一巻ということになるだろう。第二巻第一号は明治三十四年五月三日発行、この号から判型がB5判に近い四六倍判（縦259mm、横181mm）となり、四十五頁、定価金十銭。編輯・印刷は第九号と同一で、編輯兼発行者 東京市神田区錦町壱丁目拾番地 大月隆／印刷人 東京市神田区錦町壱丁目参番地 池田良蔵／印刷処 東京市神田区錦町壱丁目参番地 知足堂／発行処 東京市神田区錦町壱丁目拾番地 文学同志会。表紙の「文章世界」の題字はきわめて小さく、中央に墨書の文字で「青さ、け」とあって、主要目次と服部霞峰・大月乗山の作品も刷り込まれている。本文は二段組みで、やはり「文」の種別を設けずに文章が並んでいるが、挿絵や写真が組み込まれている点が目新しく、第一号には大月隆の肖像写真も掲げられている。



●第二卷第一号（明治三十四年五月三日発行）「青さ、け」

〈表紙〉

プラットホームの少時（\*新体詩） 服部霞峰

黒白人物の性格 大月乗山

田園小観 高下細流 1

玩且与治良兵 高下細流子 3

代某嬢知人に送る文 細流子 3

悼故長谷川彦八君 相模 高下才介 5

孤子の歌 高下細流 5

山口刀自の米寿をほぎて 6

春融々光（\*和歌） 高下才介 6

俚歌一束（\*都々逸） 細流子 9

観梅記 高下恭介 9

夏期の住居 10

溪流（\*和歌） 高下恭介 10

折々の楽み 笠間のぶ子 10

花輪（\*和歌） 笠間のぶ子 11

中等教育に於ける漢文学の価値並に漢文学者に注意 井上折

山 11

山本露葉氏よりの書翰 16

宇品の惨状を観るの記 波田青嶽 17

都の寒さをのがれ侍りて、相模の国なる、片瀬の浦にもものする、

友の許よりおこし、文の返事 熊野御堂 参佐 18

詩言魔語 笛川 18

山遊の記 吉井霹靂生 21

服従 南虎夫 22

観桜之記 畑山信像 23

探梅の記 与志田柳蔭 23

柳（\*和歌） 与志田柳蔭 24

窓の声（\*歌仙） 琴山・笛川 24

鏡像記 澗水 24

閑居董（\*和歌） 東京 奥田広子・黒田成綱 26

天絃集（\*新体詩） 相沢雲外 27

花未遍（\*和歌） 小向勇三・小山利之・倉正栄・野添操・桂樹舎松本操貞主人 27

不合格（\*口語体小説） 相沢雲外 27

草の若葉（\*俳句） 中原清秀 33

菜畑麦畑（\*俳句） 清秀選 33

花の雫（\*新体詩） きよひで 34

あだな草（\*和歌） 清秀 34

文章世界の口絵に題す 香嶽生 35

（\*俳句） 脇田海月 35

和歌（\*和歌） 山崎花水 35

怠るなかれ（\*新体詩） 山崎花水 35

吾弟妹を戒む 笑山 36

(\*和歌) 鳴川俊雄 36

おそざくら 河越愛花女 37

(\*成沢金兵衛書翰) 39

文章世界の一周年を祝す 南虎夫 40

句一束 (\*俳句) 脇田海月 41

佐保姫 (\*和歌) 河越愛花女 41

琴を聞くの記 て、せ、 44

また第二巻第二号は、明治三十四年六月三日発行。四十三頁、定価金十銭。奥付の刊記は第一号と同一。この号の表紙も「文章世界の題号はきわめて小さく、墨書の文字で「ばらの一枝／海老茶の袴」とあつて、本を手にした袴姿の女学生の絵が、主要目次とともに掲げられている。口語体の文章が散見されるようになるのも、この号からである。

●第二巻第二号(明治三十四年六月三日発行)「ばらの一枝／海老茶の袴」

言文一致に就て所感を陳ぶ (\*口語文) 折山潜夫 1

柞の露 (\*文語体小説) 高下細流 2

苦茗一啜 (\*俳句) 高下よた丸 6

幻影 (\*和歌) 笛川 6

獅々吼録 川村鷗眠 7

月影 (\*新体詩) 水泡 8

巖 (\*新体詩) 柳下庵永眠居士 9

岨山道 (\*新体詩) 素堂 9

名月 (\*新体詩) 三界無庵 9

(\*俳句) 柳下庵 10

白雲録 (\*和歌) 三界無庵 10

孤巖録 黒無晶生 10

春の入相 (\*新体詩) 藤波しま子 12

現時の交友 北海道紳士 12

青山椒 (\*俳句) 中原清秀 18

若葉青葉 (\*俳句) 清秀選 19

花菖蒲 (\*新体詩) きよひで 20

み、ず書 (\*和歌) きよひで 21

夕月影 (\*俳句) 中原清秀 21

現海余滴 小林澗水 21

青葉のかげ (\*和歌) 河越愛花女史 22

鉄道馬車 (\*口語文) 淡水生 27

断雲 今井菊堂 29

双松舎出詠 (\*和歌) 長縄兼子・岡田良子・高木絹子・関

屋鶴子 30

双松断片 (\*和歌) 関屋祐之 30

俳句一束 (\*俳句) 脇田海月 31

川声山影 (\*俳句) 梅泉子 31

宮城拝観之記・入営以来ノ心得（\*無署名、末尾に「細流加筆」とある） 31

春の野遊・今と昔の出生<sup>(マ)</sup>氣質・自覚悟道・其精神を聴け・蓮・生活・楽しみ・猫には鼠をとらすべし・経論・実行・境遇・取り方・山と水・日本武士・物各々方あり道あり・道具・二十世紀の新天地・安心立命・著者の意・口と腹（\*無署名、表紙の主要目次では一括して「活学談」とある） 32

以上で、今日判明している『文章世界』の目次を補ったことになるが、こうした定期刊行のほか、『文章世界』では定期・臨時増刊と銘打った号を何冊か出している。現在判明しているのは、次の号である<sup>(8)</sup>（第二巻五号のみ増刊号の表示がないが、ここに一括する）。巻号の表記は、それぞれの号による。

- ・椎の舎信成編『紀行文抄 郊外散策』（文章世界第一巻四号 臨時増刊、明治三十三年五月二十五日発行）
- ・畑馬治郎著『作法明解 作文指南』（文章世界八号臨時増刊、明治三十三年八月二十日発行）
- ・井ノ口央洲著『小文学』（文章世界臨時増刊第一巻十三号、明治三十四年一月三日発行）
- ・大月隆編『悲哀の快観』（文章世界定期増刊第一巻十五号、明治三十四年三月三日発行）
- ・大月隆編『活恋』（文章世界定期増刊第一巻十六号、明治三十四年四月三日発行）

・藤波しま撰『現代理想 女子講本』（文章世界第二巻五号、明治三十四年九月三日発行）

これらは、単著もあれば文学同志会会員の作品集もあり、古人の文章のアンソロジーや作文指南もあって、バラエティに富んでいる。また判型も通常の号に準ずる菊判だけでなく、四六判や小型の菊半截判などまちまちである。その内容とこれらを含んだ『文章世界』の時代的意義と役割、およびそれ以後の大月隆と文学同志会の活動については、稿をあらためて検討することにした。

#### 注

- (1) この点について、大月隆の小説『臥龍梅』（明治三十九年十月、文学同志会）を取り上げた小橋玲治氏の「清子は蒙古王の家庭教師となる——大月隆『臥龍梅』（一九〇六年）に見る女性家庭教師表象の側面——」（『待兼山論叢 文学篇』第四十七号、二〇一三年二月）に、「作者である大月隆という人物、そして彼が経営し、自らの著作の多くを発行していた文学同志会について、詳しい事はあまり分かっていない」という指摘がある。またその注において、『日本近代文学大事典』（講談社、一九七七年一月〜七八年三月）の「大月隆仗」の項目ほかで、二人が混同されていることが指摘されている。
- (2) これらの号のうち、「鶴城」については、大月隆のものであるかどうか疑わしい。この点については後述したい。
- (3) 木戸雄一氏の「自然」の争奪——「小説の脚本化」と「戯曲的小説」——（『日本文学』第六十巻十一号、二〇一一年一月）に、一九〇〇年代の「文壇の新思潮の洗礼を受けた文学青年の身過ぎ世過ぎの産物」として、「例えば『小説 新不如帰』（一九〇九（明治四二年、盛林堂）の著

者小林紫軒は、文学家志望者の互助組織「文学同志会」にその名が見え、  
という指摘がある。ちなみに小林紫軒が文学同志会から刊行した著書には、  
『美文組立法』（明治三十七年四月）、新体詩集『玉琴集』（明治三十七年十  
一月）などがある。

(4) 三人の合同詩集で、児玉花外「麦笛」、山田枯柳「柳影集」、山本露葉「葡  
萄の葉蔭」を収める。奥付の著者には山本露葉の名前があり、国立国会図  
書館の所蔵本では、刊行の日付が七月と墨書訂正されている。

(5) 国立国会図書館の所蔵本では、奥付の刊行の日付が明治三十四年三月と  
墨書訂正されている。

(6) 国立情報学研究所 Open Books のデータによれば、このほかで所蔵の確  
認できるものとして、大阪教育大学附属図書館（一卷一号）、日本近代文  
学館（一卷二号）、東京大学 大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史  
料センター（明治新聞雑誌文庫）（二巻一号）、人間文化研究機構国文学研  
究資料館書庫（一卷一号）がある。また、早稲田大学図書館「柳田泉文庫」  
に、第一巻一・二号の所蔵がある。

(7) 国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」に、各号の細  
目が、表紙・奥付など数葉の画像とともに掲載されている。

(8) このうち、『紀行文集 郊外散策』『作法明解 作文指南』『小文学』は  
架蔵本、『活恋』は東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書「痴遊  
文庫」所蔵本、『悲哀の快観』『現代理想 女子講本』は早稲田大学図書館  
「衣笠詩文庫」所蔵本による。

〔附記〕 本稿の執筆にあたり、尾鷲市中央公民館郷土室、同志社大学今出川図  
書館、東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書室に資料閲覧の便宜  
を与えられた。記して感謝申し上げます。